小学校高学年におけるモラル・スキル・トレーニングプログラムの開発的研究
－規範意識と道徳的行動傾向の育成を目指して－

所属校：調布市立緑ヶ丘小学校
氏　名：水　　野　　睦　子
派遣先：上越教育大学大学院

キーワード：モラル・スキル・トレーニング・規範意識・小学校高学年・道徳の時間

Ⅰ　研究の目的

近年、いじめ、不登校、小１プロブレム、学級崩壊などの問題が顕在化し、教育をめぐる現状は深刻である。こうした問題の背景には様々な要因が考えられるが、その要因の一つとして規範意識の低下が挙げられている。

教育再生会議第一次報告（2007）では、子どもの規範意識の低下を指摘し､「子供たちに社会の決まりや規範意識を学ばせる」と道徳教育の再生を大きく取り上げた。教育再生会議第二次報告（2008）では、その対応策として「徳育の教科化」を提言した。また､『小学校学習指導要領』(2008）では、第１章総則第１の２で「社会生活上のきまりを身に付け、善悪を判断し、人間としてしてはならないことをしないようにすることなどに配慮しなければならない」と規範意識について明記されている。今後、より一層規範意識の育成を重視した指導が求めれらることになろう。

規範意識については、小学校高学年から低下が顕著であることが明らかになっている。また、規範意識が身に付いても子どもたちの日常生活で行動化できないことも問題として挙げられる。規則（ルール）やきまりだから守らなければならないという意識と同時にその行動化が求められるのである。

この具体的な行動の仕方を教えると同時に、道徳性の涵養をねらっているのが、モラル・スキル・トレーニングである。これまでは具体的な行動の指導は道徳の時間以外、例えば特別活動や総合的な学習の時間等で指導することとされてきた。しかし、近年の子どもたちの規範意識の低下から、道徳の時間にも具体的な指導が必要になってきている。特に、高学年段階でより必要とされている状況といえる。

そこで、本研究では、小学校高学年の児童を対象に規範意識を育成し、行動傾向を向上させるモラル・スキル・トレーニングプログラムを作成・実施する。プログラムの実施によって規範意識と行動傾向を高めることができたかを検証し、また、その検証結果を踏まえて、新たなモラル・スキル・トレーニングプログラムを開発することを目的とする。

Ⅱ　研究の方法

１　調査対象

東京都内公立小学校１校２学級、計 63 名の児童

２　プログラム実施期間

2009 年５月 18 日（月）～2009 年６月 12 日（金）
実験群に、週１時間の道徳の時間に実施。計４回。
なお、統制群には調査終了後、実験群と同じプログラムを実施した。

３　調査時期

事前調査：2009 年５月 18 日（月）
事後調査：2009 年６月 12 日（金）

４　調査材料

(1) 規範意識尺度　小澤高嗣（1997）

モラル・スキル・トレーニングプログラムの実施により、規範意識を高めることができるかを検証するために用いる。小澤は場面を学校現場に限定し、小学校高学年を対象に尺度を作成している。下位因子は「規範意識」「規範感情」「賞罰意識」の３因子となっており、５件法で 48 項目ある。

(2) 道徳性診断検査「HEART」

HEART（Human External Action and its Internal Reasoning Type）は道徳性の発達を学習指導要領に則してその実現度・達成度を「行動傾向」とし、その背景構造を「内面形成」として測定する。２部構成になっており、第１部は、内面形成をみるための場面をイラストで示したテストである。４肢から成る回答を選択する方法で、22 項目ある。第２部は行動傾向をみるための短文形式のテストである。４件法で 53 項目、計 75 項目である。本研究は規範意識の育成と同時に道徳的行動の育成をねらっているため、道徳的行動傾向を高めることができるかを検証するために用いる。

(3) 振り返り用紙

モラル・スキル・トレーニングプログラムの授業の終末に学習のまとめとして記入させる。Selman, R.L.（1995）の「役割取得能力の発達段階」（渡辺弥生 2001 p.22）を用いて、役割取得能力レベルから、道徳的行動傾向のレベルを分析した。「役割取得能力」とは相手の気持ちを推察し、理解する能力のことである。

Ⅲ　研究の結果

１　調査材料の分析結果

規範意識尺度と道徳性診断検査「HEART」は、結果を分析するために、JavaScript-STAR version 4.4.2j 統計プログラム（田中敏・中野博幸 2008.10.3）を用いて分析した。群（実験群・統制群）×時期（事前調査・事後調査）の２要因混合計画（AsB-Type Design）による分散分析を行った。また、小学校高学年の発達段階を考慮して、男女別の分析も行った。

(1) 規範意識尺度　小澤高嗣（1997）

統制群との比較において、「女子・規範認識」に有意な上昇を示し、モラル・スキル・トレーニングプログラムの効果が示唆された。

「規範感情」「賞罰意識」においては、有意差がみられなかった。

(2) 道徳性診断検査「HEART」

「内面形成」に関しては、全体、男女別にみても、有意差がみられなかった。

「行動傾向」に関しては、実験群が有意に低下した。その原因として、メンタル・リハーサルや授業後の課題等、般化のための手段をとらなかったことが考えられる。また、小学校高学年の発達段階の心理的必然ととらえることもできる。

(3) 振り返り用紙

４回の授業において、「自分の視点」から、「自分と相手の視点」、「自分と集団の視点」へと、視点の広がりがみられた。

２　新しいモラル・スキル・トレーニングプログラムの提案

分析結果を踏まえ、調査で実施したプログラムに修正を加えた。指導過程から３点、指導内容から３点、計６点の修正を提案する。

指導過程	提案１	指導過程にメンタル・リハーサルとそのロール・プレイングを取り入れる。
	提案２	指導過程に行動目標に取り組む課題（道徳１週間アンケート）を取り入れる。
	提案３	２つの指導過程、①短縮の指導過程と②通常の指導過程を作成する。
指導内容	提案４	メンタル・リハーサル後のロール・プレイングで、相手の気持ちに着目させる。
	提案５	シェアリングの指導内容を、ロール・プレイングをした時の気持ちに変更する。
	提案６	振り返り用紙の質問項目を３つの視点の獲得に順序に沿った内容に変更する。

Ⅳ　考察

１　全体的考察

本研究では、規範意識を「集団生活において、日常的な規則（ルール）やきまりを守ろうとする意識」と定義し、小学校高学年の児童においては集団生活の場となるのは学校であるため、学校現場に限定して論を進めた。本来、規則（ルール）やきまりは外的規制力をもち、けむたいものである。しかし、集団で学習し、生活するためには、規則（ルール）を守ることが、児童の人権や学習権を保障することにつながると考える。

これまでの道徳の時間は、心情主義と言われ、読み物資料の主人公の気持ちを問うことが行動につながると考えられてきた。しかし、頭では分かっていても行動につながっていない現状がみられる。規範意識が身に付いても、児童の日常生活で行動化できないことに問題がある。つまり、規範意識と同時にその行動化の育成が求められるのである。

２　研究の成果

モラル・スキル・トレーニングプログラムの実施によって、規範意識の育成に効果があったことは、学校教育の道徳の時間への一つの解決策としての可能性を示唆していると考えられる。小学校高学年は思春期の入り口であり、思春期における規範意識の低下は発達段階過程において必然的であることも踏まえて、規範意識の内面化を目指したプログラムの作成が求められる。

３　今後の課題

今後の課題を３点挙げる。１点目は、データには表れにくい行動傾向をどのように把握するかということ。２点目は、モラル・スキル・トレーニングプログラムと特別活動、総合的な学習の時間、他教科等をどのように関連させていくかということ。３点目は、道徳教育のベースとなる人間関係を学級集団においてどのように育んでいくかということである。

以上、３点については今後の課題として検討していく必要があると考える。

引用文献

(1) 小澤高嗣　1997　「児童の規範意識に関する研究－規範行動との関連を通して－」　上越教育大学修士論文（未公刊）

(2) 田中敏・中野博幸　2004　『クイック・データアナリシス』　新曜社

(3) 渡辺弥生　2001　『VFL による思いやり育成プログラム』　図書文化社